

第2回中国・四国ブロッククラブ育成推進協議会：開催報告

日時：2005年12月3日(土) 13時～17時

会場：鳥取県米子コンベンションセンター

中国・四国ブロック全体で指定クラブは78にのぼるが、2回目を迎えた協議会には、46クラブの代表者が参加した。第1回目の協議会では、「情報の共有化」と「ネットワークの強化」に重点を置いて会を進めたものの、「日頃の悩みをみんなに打ち明け、スッキリしたけど…」という、企画サイドにとってはスッキリしない感想を幾つかもらった。つまり、指定クラブの運営担当者にとって、協議会がストレス解消の意味合いが強く、クラブ育成に対する夢と希望といったワクワク感を得て地域に帰ってもらうという地方企画班としての想いは、十分に伝わらない面もあった。

そこで今回の協議会では、愚痴をこぼす場ではなく、クラブ育成に対してポジティブなイメージを抱いてもらい、地域やクラブ組織の「ウリ」、すなわち事業化に結びつけられそうな経営資源に対する気づきと発掘、そしてクラブのことをより地域の人々に知ってもらうためのプロモーションの方策について具体的に考えてもらうことにポイントを置いて進めることにした。

1. プログラムの概要

パネルディスカッションは、「いきいきとしたクラブづくりの進め方：クラブの魅力・ウリとは？」というテーマによって進められた。パネラーには元ヴィッセル神戸のJリーガーで、NPO法人やまつみスポーツクラブのGMを務める地方企画班員の塚野氏と、全国で最も総合型地域スポーツクラブの育成が進む富山県広域スポーツセンターのプロジェクトマネジャーで、北信越・東海ブロックの地方企画班員も務める南木氏に登壇いただいた。またコーディネーターには、パネラーの魅力を軽妙に引き出す地方企画班員で広島市立大学の曾根氏をお願いした。

創設時のクラブが抱える苦労や悩みとして、拠点施設、財源、指導者や会員の確保などが取り上げられるが、このような問題にどう取り組むべきかという曾根氏の問いかけに対して南木氏は、まず発想の転換を図ってほしいという投げかけをした。つまり、「活動場所を確保したい！」や「会員を集めたい！」ということは、クラブでやるべきことが明確な証拠である。クラブとして課題を持っていることは、問題でもなければ、マイナス要因でもないことをまず認識してほしいと訴えかけた。例えば、クラブをより多くの人々に知ってほしいのであれば、広報活動が必要になるが、多くのクラブが躓くこととして、「誰に、何をメッセージするか？」ということが具現化されていないという指摘がなされた。



富山県の事例に、まずクラブ育成にかかわる利害関係者をリストアップし、クラブ育成の必要性とこれからすべきことを短時間に説明するためのマニュアルを作成し、それをもとにクラブの創設を試みる地域の人たちに、自分たちで実際にプレゼンをしているクラブがある。プレゼンの際には、「子どもたちのスポーツ環境を整備する」という目標をしっかりと語り、想いやこれからやろうとすることを

ばらつかせずに、同じメッセージを繰り返し送り続けることによって、地域の信頼創造を図る工夫をした。また同氏は、「失敗とはやめるとき、すなわち歩みを止める時のことであり、想いを持ったら、それを実現するためにやり続けることと、それをより多くの人々と共有することが重要である」という民間企業出身者らしいメッセージを会場に送った。

曾根氏は、「クラブの魅力とは人の魅力であり、事業の魅力でもある。クラブの“ウリ”を活かした事業化がクラブ育成のポイントとなる」と示唆し、やまつみスポーツクラブのウリは何かを塚野氏に問いかけた。塚野氏は、「楽しいプログラムをすること」、クラブの“ウリ”を事業化する工夫が重要であることを強調した。やまつみスポーツクラブは、JFL に所属する鳥取県のサッカートップチームの SC 鳥取のマネジメントも行っている。塚野氏は、この SC 鳥取の選手を活かした「復活！公園遊び」というプログラムの事例を紹介した。

このプログラムは、大人たちが誰もが一度は経験したメンコや鬼ごっこといった昔遊びを米子市内の公民館と連携を図り、各地区で子どもたちを集めて展開しているものである。そこでは SC 鳥取の選手がガキ大将役を務める。付き添いできているお父さんやお母さんまでもが本気になって遊ぶという。子どもたちの外遊びが減りつつある現在、PTA や児童会から引く手あまたで、米子市内の約 16,000 人の小学生のうち、年間約 12,000 人の子どもたちとこのプログラムを通じて接する(遊ぶ)ようである。つまり、SC 鳥取の選手という“ウリ”を活かしながら、外遊びに対するニーズをくみ取り、それを事業化するだけでなく、SC 鳥取の選手が米子の子どもたちとより多く接することによって、チームや選手の存在はさらに地域に浸透するという相乗効果が得られている。

魅力的な事業について南木氏は、部活動を引退した中学3年生を対象とするスポーツ教室や、小さい子どもを抱え活動に参加できなかったママの支援を行いプログラムへの参加を促進したという事例を紹介し、スポーツ活動に存在する隙間を埋める工夫や、ニーズのキャッチとそれをかなえる方策について提案した。

話題満載の2人のパネラーの話をもとに、その後、あらかじめ、都市規模、設立母体、クラブの特徴が類似する地域によって分けられていたグループでディスカッションを行った。冒頭でも記したように、このグループワークでは、愚痴や悩みを打ち明けてスッキリするという目的ではなく、「あなたのクラブのウリになるものは何か？またそれをどのように活かし、事業化したいと考えているか？」「あなたのクラブで現在、気づいていない、もしくは眠っている資源はないか？またそれをどう活かせるか？」「会員獲得や会員の継続を促進する方策やユニークなアイデアは？」「新規会員獲得を目的とするイベントを開催する場合、どのような広報活動を行い、クラブのことを知ってもらうか？」といった4つのテーマで、できる限り具体的に、話を聞いている他のクラブの人たちが自分たちにもできそうだと実感できるようなポジティブなディスカッションを行った。全体会も堅苦しくなく、発表者が自分のクラブの“ウリ”や今後実施しようとする事業の紹介とその参加への呼びかけをするなど、和やかな雰囲気のまま進んだ。

最後にコーディネーターの曾根氏が、「いきいきしたクラブづくりを進めるためには、まず“楽しさ”が必要。しかもそれは、まず自分が楽しいことが大切で、次にクラブが地域になくてはならない存在となることが大事。自分のためであり、気がつけば、他の人や地域のためになっている。今日のパネルディスカッションで示されたように、クラブができることは数多くあり、クラブの有能感を示すことはまだまだできる」と今日のプログラムを振り返った。さらに、社会学者・上野千鶴子氏の言葉を引用し「21 世紀は様々な縁を選択する時代である。地縁、血縁、社縁だけでなく、世代を超えた新しい縁・つながりを持つことに、クラブは大きく貢献できるだろう」という言葉で会を締めくくった。

2. 情報交換会

今回のクラブ育成協議会では、“クラブライフを楽しもう！”というコンセプトのもとに、単なる飲み会ではない情報交換会をセッティングした。会議場のすぐ近隣にあるやまつみスポーツクラブの室内アリーナをお借りし、やまつみスポーツクラブのとっておきのプログラム「復活！公園遊び」を体験することにした。メンコなどの懐かしの昔遊びや、テニスなどを楽しみながら、“楽しいクラブライフってどんなもの？”ということ、指定クラブの皆さん、やまつみスポーツクラブのスタッフと会員、またSC鳥取の選手と交流を図りながら体験した。

会に彩りを添え、クラブライフの醍醐味をより味わってもらうために、参加者が銘酒、名産を持ち寄り、軽く飲み物や食べ物を取りながら、お国自慢やクラブの夢を語り合い、楽しい一時を過ごした(結局、ノミネーションもしてる...)。メンコとテニスに夢中になり、年齢どころか、我を忘れてしまった人や、ひたすらカニを食べていた人、みんなのために焼き芋や焼き牡蠣を提供してくれていた人、また紙コップを傾けながら、クラブに関する情報交換をしていた人、

参会した人々が各々の楽しみを享受していたが、「楽しく集える居場所」、それがクラブであることをみんな実感したに違いない。



(報告：中国・四国ブロック地方企画班長 長積 仁)